

## 20. 感染症情報センター

センター長 岡部信彦

## 概要

平成 11 年 4 月に施行された感染症法では、サーベイランスシステムの強化が示されている。同法に基づいた基本指針の中には患者発生状況サーベイランスと同様に病原体に関する情報の収集、分析及び提供と公開も必要であるとされている。指針をふまえた局長通知では、感染症発生動向調査事業の実施について述べられている。その中には国立感染症研究所に中央感染症情報センターを、地方感染症情報センターを各都道府県等域内に 1 か所設置することが述べられ、それぞれの役割が記されている。

感染症情報センター(IDSC)は、国のサーベイランス事業の中で中央感染症情報センターとして位置づけられ、地方感染症情報センターならびに都道府県等の協力を得て、感染症法に規定された 1-4 類感染症を中心にしたサーベイランスを行っている。病原体情報については WISH Net、IDSC ホームページ(<http://idsc.nih.go.jp/index-j.html>)、病原微生物検出情報(IASR)を中心として、疾患の発生動向については感染症週報(IDWR: Infectious Disease Weekly Report)などを中心として、収集された情報の迅速な還元と公開を行っているところである。血清疫学調査としては、感染症流行予測調査事業の中でこれを行っている。このデータ - 等を基礎とし、感染症対策の重要な一角としての予防接種のあり方についてのエビデンスを求めることも IDSC の重要な業務である。

感染症発生への適切な対応の一環として実地疫学の重要性が理解されつつあるが、これにかかわる人材の育成は急務である。感染研では業務の一つとしてこの人材教育(実施疫学調査専門家養成コース(FETP))が行われているが、研修実施の主体は IDSC が行っている。

最近の約 1 年間に IDSC がサーベイランスに関して積極的に取り組んだことの詳細はそれぞれに記されているが、その概要は以下のとおりである。

## 1. 感染症発生動向調査事業の実施

厚生(労働省)感染症発生動向調査事業における全国からの患者発生報告を集計処理し、各都道府県へのデータ還元。必要に応じて地方感染症情報センター等

への問い合わせを行い、それらの結果を総合してコメントを作成し、表とグラフの作成も行き、ホームページ上での情報還元を行った。重要事項については厚生(労働省)結核感染症課へも情報提供を行った。

2. IDWR, IASR の定期的な発行。内容のさらなる充実とシステムの改善。

3. 感染症発生動向調査事業年報 CD-ROM 版データ集(2001/1-2001/12) の発行

感染症法が施行されてからの感染症発生動向の確定データを迅速に還元するためには、時間のかかるコメントの作成を最小限にしてデータ集の形で発行するのが望まれる。このため、利用者がデータ処理をできるようにエクセルの表を中心として収載した CD-ROM 版(2001/1-2001/12) を平成 14 年 12 月に発行した。前回のものと比べて疾患の詳細分類、感染地別の分類をするなど、内容の充実を図った。引き続き、2002 年度 CD-ROM 版(2002/1-12) の作成のために全国からの確定データの収集を行いつつあるが、本年度よりも早期の発行を目指している。

4. 院内感染対策サーベイランス事業(JANIS)

平成 9 年度より継続されてきた厚生科学研究「薬剤耐性菌による感染症のサーベイランスシステム構築に関する研究」、および「薬剤耐性菌症例情報ネットワークに構築に関する研究」における研究結果や試行を踏まえ、平成 12 年 7 月より「院内感染対策サーベイランス」事業の運用が開始され、さらにこの結果は感染症情報センターホームページを通じてインターネット公開した。

5. 実地疫学調査専門家養成コース(FETP)

FETP の実施は 4 年目となった。これまでの研修開始は 9 月であったが、平成 14 年度からは 4 月より研修開始とし、5 期生 4 名(島田 靖、逸見佳美、森 伸生、吉田英樹)が参加した。平成 14 年 8 月 2 期生 3 名(加来浩器、田中 毅、松井珠乃)研修終了した。平成 13 年度に引き続き Dr. John Kobayashi (Washington State Health Department) に長期コンサルタントを依頼した。

積極的な疫学調査、地域における調査がさらに充実し、公衆衛生領域における認知が進んでいる。

6. 症候群サーベイランスの実施

現行のサーベイランスは主に診断名が確定した疾患サーベイランスであるが、米国における炭疽菌事件等より、危機的状況におけるサーベイランスとして、平成 12 年度より症候群サーベイランスの導入に関する検討を行った。平成 14 年 FIFA ワールドカップサッカー大会においては、開催都市並びに東京都の協力を得て、症候群サーベイランスを実施した。なおこの実施にあたり、韓国予防衛生研究所と密に協力をを行い、韓国でも初の実施を行っている。これは平成 14 年度末より世界的に問題となった SARS サーベイランスの実施にあたり、基礎的な経験となった。

7. 感染症法は制定から 5 年後に見直しをすることが定められている。我が国のサーベイランスは、法実施をきっかけに多くの改善が行われた。しかし、対象疾患や疾患定義の問題、サーベイランスの質の問題、個人情報と公開情報のバランスの問題、入力システムそのものの問題、感染症対策への反映の問題等々、法内容あるいは運用方法の改善や修正など、見直すべき点も多々ある。サーベイランスはデータの集積のために行うものではなく、感染症の対策に利用されるべきものとして存在する。それぞれの疾患についてサーベイランスを行う目的を明確にし、なおかつ包括的なものを構築していく必要があり、この点の研究は IDSC にとって重要なテーマの一つとして平成 14 年度も継続実施した。

8. 予防接種室においては、これまでの感染症流行予測のほか、平成 13 年度より予防接種の効果、安全性、あるいはその実施にあたっての情報等、情報センターホームページ内に予防接種のサイトを作成し、広い情報提供を開始し、平成 14 年度はさらにこれを充実させた。また国における予防接種に対し、積極的にデータを提出し、改善に向けての提案などを行うようになった。

9. 病原診断室においては、従来の研究対象であったアデノウイルスの研究に加え、不明病原体の検索について充実に図りつつある。

10. 平成 14 年 4 月より旧国立公衆衛生院より、2 名の室長が配置転換となり、感染症情報センター 5 室、6 室が新設さ

れ、それぞれの室長となった。旧国立公衆衛生院の業務を引き継ぎ、5 室においては細菌、6 室においてはウイルスについて、自治体における病原体検査の研修等を行い、また病原体検査に関する情報の収集、検査法の開発等を行うようになった。業務は村山庁舎で行っている。

11. 平成 14 年度末には SARS が発生し、WHO は Global Alert をかけた。感染症情報センターは総力を挙げ、国内外より情報の収集、分析を行い、情報センターホームページに緊急情報として SARS の項目を設置、広く最新情報の提供を行った。また対策案の提言、積極的疫学調査の実施、WHO への調査協力、なども行った。

人事関係では、平成 14 年 3 月情報管理専門官村上修司が厚生労働省統計情報部へ異動。平成 14 年 4 月伊藤健一郎が第 5 室室長として、西尾 治が第 6 室室長として旧国立公衆衛生院より異動、平成 14 年 11 月に砂川富正が第 1 室主任研究官として横浜検疫所より異動。平成 14 年 8 月小坂 健研究員が米国ハーバード大学公衆衛生大学院留学より帰国。

なお岡部センター長は以下の委員の委嘱を国より受け、情報センター業務・研究の結果、成績などを背景として国における感染症対策の検討に参画した。

厚生労働省健康危機管理調整会議委員  
厚生労働省厚生科学審議会臨時委員  
(感染症分科会員)

厚生労働省薬事・食品衛生審議会臨時委員  
(医療機器・体外診断薬診断部会員)

厚生労働省薬事・食品衛生審議会臨時委員  
(食中毒部会員)

厚生労働省疾病・障害認定審査会臨時委員  
(感染症・予防接種審査分科会員)

厚生労働省厚生科学審議会生活環境水道部会委員  
厚生労働省疾病・障害認定審査会委員  
(感染症・予防接種審査分科会員)

業務・研究業績

I. 感染症発生動向調査事業の実施

1 感染症法に基づく感染症発生動向調査

厚生（労働省）感染症発生動向調査事業における全国からの患者発生報告を集計処理し、各都道府県へのデータ還元を行った後、全国集計データをダウンロードし、データ変換の後エクセルへの読み込みを行い、時系列解析、地理的解析などを行った。さらには、必要に応じて FETP より地方感染症情報センターへの問い合わせを行い、それらの結果を総合してコメントを作成し、表とグラフの作成もを行い、ホームページ上での情報還元を行った。また、重要事項については厚生労働省結核感染症課へも情報提供を行った。[岡部信彦、木村幹男、小坂 健、谷口 清州、FETP 研修生、江頭圭三、大竹由里子、松岡静香]

2 院内感染対策サーベイランス

院内感染対策サーベイランス事業(JANIS)

平成 12 年 7 月より運用開始となった「院内感染対策サーベイランス」では、月ごとの集計結果が全国の集計結果とともに参加施設に還元される。一方、院内感染対策のエビデンスとして、3 ヶ月ごとの集計が「季報」としてウェブ上で公開されることになった。この公開にあたり、データの有用な提供方法を検討し、サーベイランスの解析結果とともに「院内感染対策委員会」の専門家の承認を経て、検査部門、集中治療室部門、全入院部門のそれぞれについて Web コンテンツを作成し、順次情報を公開した。[谷口清州、松岡静香、岡部信彦、荒川宜親(細菌・血液製剤部)、山根一和(細菌・血液製剤部)、医療情報システム開発センター、厚生労働省医薬安全局安全対策課、平成 14 年度厚生科学研究費補助金「薬剤耐性菌の発生動向のネットワークに関する研究」研究班]

II. 感染症発生動向調査事業に関する応用研究・業務

1. サーベイランスシステムの改善に関する研究

厚生省新興再興感染症研究事業として「効果的な感染症発生動向調査のための国及び県の発生動向調査の方法論に関する研究(主任研究者 岡部信彦)を組織し、感染症サーベイランスの在り方について研究を行った。[岡部信彦、谷口清州、山下 和予、小坂 健、大山卓昭、橋戸 円、中瀬克己、中島

一敏]

2. 感染症発生動向調査に基づく流行の警報・注意報に関する業務

平成 12 年 12 月から本格運用となった「警報発生システム」によって得られた感染症の早期流行情報を、麻疹、インフルエンザなどについて「感染症週報」で取り上げて、保健衛生に関わる専門家にむけて注意を喚起した。特にインフルエンザについては、一般市民の高い関心に答えるべく、保健所ごとの早期流行状況を、警報(赤色)、注意報(黄色)に色分けして日本地図上に表示し、ウェブ上で公開した。共同通信社をはじめとした新聞各紙、テレビなどの報道機関で定期的に取り上げられるようになり、感染症情報の迅速な国民への提供に貢献した。[谷口清州、小坂健、松岡静香、永井正規(埼玉医科大学)、橋本修二(東京大学)、村上義孝(大分県立看護科学大学)、淵上博司(埼玉医科大学)]

3. 感染症発生動向調査に基づく注意報・警報システムおよび全国罹患数推計に関する研究

上述の研究班の分担として、これまで3年間の経験を元に注意報警報レベルの妥当性について検討を行い、一部疾患において基準値の変更を行った。また2001年度の全国罹患数推計をおこなった。[谷口清州、小坂健、永井正規(埼玉医科大学)、橋本修二(藤田保健衛生大学)、村上義孝(国立環境研究所)、淵上博司(埼玉医科大学)]

4. 国際保健規則(IHR)改正に係わる業務

世界保健機関(WHO)と加盟国との協力で勤められている IHR の改正について、WHO 本部と連絡調整をおこなっているが、本年、ジュネーブより IHR 改正チームが訪日し、厚生労働省結核感染症課、検疫所業務管理室、および各検疫所と合同で IHR 改正の進捗状況および具体的な改正の内容についての合同会議を行い、今後の予定あるいは協力体制について議論を行った。[重松美加、谷口清州、Sandy Cocksedge (WHO)、Max Hardiman (WHO)、厚生労働省結核感染症課、検疫所業務管理室]

5. バイオテロ対策に係わる業務

世界保健機関、あるいは G7 + メキシコと協力しながら、バイオテロ、特に天然痘に関する対応方針を作成するに当たり、国際

会議において各国の情報を収集議論し、厚生労働省に技術支援を行い、本邦におけるガイドラインの作成、あるいは研修会への協力を行った。[谷口清州]

## 6. 食品と微生物におけるリスクアセスメント

1) 腸炎ピブリオ感染症と魚貝類におけるリスクアセスメントについて WHO、FAO 共同プロジェクトの中で草案グループの専門家として日本のデータ収集、提供及び草案を作成した。[小坂健、春日文子]

2) 日本における SRSV のリスク評価の初期段階として、リスクプロファイリングの作成に協力した。[重松美加]

## 7. 感染症発生動向調査の連携に関する研究

厚生科学研究事業「国及び県の発生動向調査の連携及び海外の定点設定に関する研究」のなかで、感染症情報の有効な活用と対策へすみやかにつなげるために、国及び発生動向調査の連携と海外機関との連携について検討した。特に、各分野での既存のネットワークを調査し、ネットワーク同士の交流の可能性を研究した。[大山卓昭]

## III 感染症発生動向調査の情報の還元及びそのシステムの改善

### 1. 病原体情報の収集と月報・年報の作成

病原微生物検出情報事務局において、病原体情報センター業務として、オンラインによる報告票の収集、電算機処理、情報ファイル作成、作表、月報および年報の作成、配布に関する一連の作業が継続的に実施された。

1) 情報処理: 2002年1月 - 2002年12月の検出病原体報告数は、病原菌については、地研・保健所 9,605、検疫所 2,637、都市立感染症指定医療機関 609 であった。ウイルス(リケッチア、マイコプラズマを含む)に関しては 18,447 件の検出報告をうけた。

2) 月報の編集: 本年度中に病原微生物検出情報月報が 12 号(第 23 巻)および第 23 巻索引が編集・発行された。また、インターネットを介して毎月、病原微生物検出情報が国内外に提供された。

3) 年報の編集: 病原体情報に関する年報は、1998 年年報が「感染症サーベイランス事業年報、平成 10・11 年(1~3 月)、厚生省保健医療局エイズ結核感染症課」の病原体情報部門として編集・発行された。また欧文による報告も 1998 年年報が、

Japan J. Med. Sci. Biol., 1998 Vol.52 Supplement として編集・発行された。[山下和予、齊藤剛仁、赤塚昌江、加藤信子、野地元子、徳永真里子、木村幹男、岡部信彦]

### 2. 感染症疫学情報の解析に基づく特集記事の作成

毎月 1 回の編集委員会で、特定の感染症を患者発生情報と病原体情報の両面から分析し、「病原微生物検出情報」の特集記事を作成した。掲載された記事は、2002 年 4 月号: 梅毒、5 月号: HIV/AIDS、6 月号: 腸管出血性大腸菌感染症、7 月号: B 型肝炎・C 型肝炎、8 月号: エンテロウイルス、9 月号: コレラ、10 月号: オウム病、11 月号: A 型肝炎・E 型肝炎、12 月号: インフルエンザ、2003 年 1 月号: 細菌性赤痢、2 月号: レジオネラ症、3 月号: 風疹である。[山下和予、齊藤剛仁、赤塚昌江、加藤信子、徳永真里子、野地元子、木村幹男、岡部信彦、谷口清州、多屋馨子、伊藤健一郎、西尾治、井上栄、田村和満(細菌第一部)、渡邊治雄(細菌第一部)、寺嶋淳(細菌第一部)、荒川英二(細菌第一部)、倉文明(細菌第一部)、前川純子(細菌第一部)、倉根一郎(ウイルス第一部)、岸本寿男(ウイルス第一部)、宮村達男(ウイルス第二部)、田代真人(ウイルス第三部)、小田切孝人(ウイルス第三部)、海野幸子(ウイルス第三部)、中島節子(ウイルス第三部)、荒川宜親(細菌第二部)、新谷三春(細菌第二部)、遠藤卓郎(寄生動物部)、小林睦生(昆虫医科学部)、神山恒夫(獣医科学部)、佐多徹太郎(感染病理部)、石井則久(ハンセン病研究センター)、山本茂貴(国立衛研)、小竹久平(企画主幹)、中林圭一(企画主幹)、倉田毅(副所長)、吉倉廣(所長)、佐野正(厚生労働省)、宮川昭二(厚生労働省)、金井要(厚生労働省)]

### 3. 感染症週報の発行

平成 11 年 4 月施行の「感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律」の主旨のもとに、同時期より感染症週報の発行を開始しており、当感染症情報センターのホームページ上に PDF 版と HTML 版とで掲載している。感染症週報には「発生動向総覧」以外に、「注目すべき感染症」としてその時々で問題となる感染症を 1~2 取り上げ、詳細な解説を行い、「病原体情報」として、その時々で問題となる感染症の患者からの病原微生物検出状況を掲載している。また、「速報」においては、主に地方衛生研究所から投稿される国内で問題となったアウトブレイクに関する最新の記事などを掲載し、成田空港検疫所の協力で「海外感染症情報」のコーナーを設けて、最新

の海外感染症に関する記事を紹介し、「感染症の話」においては、所内外の協力を得て感染症法に規定された疾患、あるいはそれ以外の疾患も取り上げて解説を行い、「読者のコーナー」においては、外部からの問い合わせのあった質問につき、掲載する価値があると判断されたものを多くの読者にも公開している。[岡部信彦、木村幹男、谷口 清州、小坂 健、重松美加、多屋馨子、齊藤剛仁、石井俊也(成田空港検疫所)、菊池均(成田空港検疫所)、大竹由里子、松岡静香]

#### 4. 感染症発生動向調査、話題の病原体、海外感染症情報、旅行医学、SARS関連緊急情報、予防接種キャンペーン、Epi Info日本語版のインターネットホームページの作成および更新、維持

上記感染症発生動向調査の解析結果、時系列グラフ、地図グラフおよびHTMLファイルを作成してホームページ上にアップロードし、定期的に更新、維持管理を行った。話題の病原体、海外感染症情報、旅行医学、SARS関連緊急情報、および予防接種キャンペーン等のページについても内容を検討しHTMLファイルを作成し、アップロード、維持管理を行った。また、Epi Info 2002j 日本語版 Ver.1をホームページにて紹介し、ダウンロードできるように環境を整えた。[大竹由里子、松岡 静香、小坂 健、重松美加、進藤奈邦子、加藤信子、山本英二(岡山理科大学)]

#### 5. 感染症発生動向調査事業年報CD-ROM版データ集(2001/1-2001/12)の発行

感染症法が施行されてからの感染症発生動向の確定データを迅速に還元するためには、時間のかかるコメントの作成を最小限にしてデータ集の形で発行するのが望まれる。このため、利用者がデータ処理をできるようにエクセルの表を中心として収録したCD-ROM版(2001/1-2001/12)を平成14年12月に発行した。前回のものと比べて疾患の詳細分類、感染地毎の分類をするなど、内容の充実を図った。引き続き、2002年度CD-ROM版(2002/1-12)の作成のために全国からの確定データの収集を行いつつあるが、本年度よりも早期の発行を目指している。[岡部信彦、木村幹男、谷口清州、多屋馨子、小坂 健、重松美加、FETP研修生、加藤信子、村上修司、江頭圭三]

#### 6. 海外感染症情報の収集と評価

WER(WHO)、MMWR(米国CDC)、Eurosurveillance Weekly

(EU)、CDR Weekly(英国)、SCIEH Weekly Report(スコットランド)、CDI(豪州)、Lancet、N. Engl. J. Med.、J. Infect. Dis.、Clin. Infect. Dis.、J. Travel Med.などや、電子メールでのProMED、Outbreak Verification List(WHO、参加機関のみ)やTravelMed(国際旅行医学会、会員のみ)、あるいは、その他種々のウェブページ上での感染症情報を収集・評価し、必要な情報を関係機関に連絡した。[岡部信彦、木村幹男、谷口清州、多屋馨子、新井 智、小坂 健、重松美加、大山卓昭、砂川富正、齊藤剛仁、FETP研修生]

#### 7. 感染症検査情報収集還元オンラインシステムの改良

平成12年1月より運用を開始した感染研-地研・検疫所間の感染症検査情報(病原体情報)コンピュータオンラインシステムVersion4について、プログラムの改善を行った。インフルエンザ情報に血球の種類と濃度を追加し、入力支援機能を追加したVersion5.0を平成14年10月に、さらに不具合修正と機能追加のためVersion5.1~5.3を開発して平成15年1~3月より運用を開始した。またVersion5.0以降は各衛研がWWW-WISHの個別システムからプログラムをダウンロードできるようにシステムが改善された。[山下和予、齊藤剛仁、加藤信子、赤塚昌江]

#### 8. インターネット等による病原体情報の提供

1) 病原体情報報告機関に対して、速報を還元するために主要病原体の動向をWWW-WISHの電子会議室の病原体情報フォーラムにアップロードした。またWWW-WISHの個別情報システムによる還元情報速報閲覧のために新しいデータのアップロードを毎日行った。

2) IDSCホームページの「病原微生物検出情報」のページに、オンラインで随時報告されるデータの追加・変更を反映させた速報グラフを更新・掲載した。地方衛生研究所などからの速報記事を随時掲載した。また、累積データに基づく統計表とグラフおよび病原体名、疾病名から検索できる月報特集記事索引を毎月作成し更新・掲載した。

3) インフルエンザシーズン中、ウイルス第三部へのインフルエンザウイルス情報の転送と、WHOのFluNetへの日本の週別型別分離数データのアップロードを毎週行った。[齊藤剛仁、赤塚昌江、徳永真理子、野地元子、加藤信子、山下和予]

IV 感染症危機管理およびそれに関わる人材養成(実地疫学専門家養成プログラム)に関する業務

1. 感染症危機管理およびそれに関わる人材養成(実地疫学専門家養成プログラム)に関する業務

1)全般実施状況

FETP の実施は4年目となり、平成14年8月2期生3名(加来浩器、田中毅、松井珠乃)が研修終了した。同年4月、4期生4名(島田靖、逸見佳美、森伸生、吉田英樹)を迎えた。また平成13年度から Dr.John Kobayashi (Washington State Health Department) に長期コンサルタントを依頼し、感染症疫学研究、地方自治体との積極的疫学調査などが充実した。

2)感染症集団発生事例に対する実地疫学調査協力

平成14年度において、実地疫学専門家養成プログラム(FETP)は、以下の感染症集団発生事例に対して、地方自治体からの要請を受けて、調査協力を行った。

- 学校内麻疹集団発生事例(茨城県北茨城市)
- 施設内 B 型肝炎集団発生事例(佐賀県佐賀市)
- 施設内 VRE 集団発生事例(福岡県北九州市)
- 施設内病原性大腸菌 O157 感染症集団発生事例(福岡県福岡市)
- 施設内病原性大腸菌 O26 感染症集団発生事例(長野県長野市)
- 施設内病原性大腸菌 O157 感染症集団発生事例(徳島県海部郡)
- 施設内アメーバ赤痢感染症集団発生事例(熊本県八代市)
- 施設内 B 型肝炎集団発生事例(埼玉県騎西町)
- 循環器手術後の重症消化器合併症集積事例(宮城県仙台市)
- SARS 多国間広域集団発生事例(マニラ、フィリピン)

3)研修活動

FETP のトレーニングの一環として、初期導入研修(Edward Simoe, Jim Mendlein)とともに、英語論文の作成方法(Jim Mendlein)、生物兵器テロリズムに対する事前対応(Julie Wicklund)、院内感染症の予防と対策(Mike Bell)、インフルエンザの国際的な予防対策(Tim Uyeki)、感染症サーベイランス(Paul Kitsutani)に関するセミナーを開催した。

4) 教育研修経験

また、教育経験のための研修として、全国感染症危機管理研修会での講義、地方自治体の感染症危機管理研修会(埼玉県、鹿児島県、新潟県、熊本県、静岡県、青森県、岩手県、福岡県、秋田県、奈良県)での講義をおこなった。

5) 感染症疫学研究

平成14年度に研修終了した2期生が以下の長期プロジェクト研究発表をおこなった。

- 東アジア(台湾、韓国、日本を中心とした)におけるマラリア予防対策(加来)
- 日本におけるツツガムシ病の疫学(松井)
- 各国(日本、アジア・ヨーロッパ各国、ニュージーランド等)検疫システムの比較(田中)

6) 感染症サーベイランス活動

毎週ごとに収集されるサーベイランス報告対象疾患の情報を監視・解析し、必要に応じて地方自治体とともに公衆衛生的介入を実施した。

- 麻疹症例増加に対する予防接種推奨
- 夏季のエンテロウイルス流行時期での注意喚起、等

7) 感染症情報の還元

感染症サーベイランス、感染症集団発生事例に対する実地疫学調査協力などで得られた情報を病原体検出情報(月報)、感染症週報などを通じて一般住民、公衆衛生従事者などに還元した。また、インフルエンザ流行時期(10月~3月)には一般住民からのインフルエンザに関する問い合わせに対応する「インフルエンザホットライン」の中心的役割を果たした。[大山卓昭、砂川富正、谷口清州、多屋馨子、小坂 健、重松美加、FETP]

2. 希少感染症診断技術向上事業に関する業務

平成14年度は対象疾患として、西ナイル脳炎、バルトネラおよびマイコプラズマ、E型肝炎、狂犬病、赤痢アメーバおよびマラリア、オウム病およびQ熱が取り上げられた。研修会は平成15年2月、当感染研で2日間開催され、56地研が参加した。それぞれの疾患はウイルス1部、細菌2部、ウイルス2部、獣医学部、寄生動物部、感染症情報センター、細菌1部の協力により行われた。また、本事業の一環として、レファレンスセンター(エンテロウイルス、溶血性連鎖球菌、カンピロバクター)の運営がウイルス2部、細菌部、国立衛生研、東京都立衛生研究所の協力でなされた。また、新規レファレンスセンターが、それぞれ全国の支部センターと共に発足した。(レジオネラ、アデノウイルス、寄生虫、ジフテリアおよび百日咳)。[稲田 敏樹、橋戸 円、渡邊 治雄(細菌部)]

3. 新興再興感染症技術研修

本研修は、保健所あるいは地方衛生研究所において細菌検

査業務に従事するものを対象として、新しい知識及び技術の習得を目的としている。14年度は ブドウ球菌エンテロトキシンの検出 ビブリオ・バルニフィカス検査 リアルタイム PCR を中心として、5日間、保健医療科学院白金台庁舎で行った。参加者は、保健所2名・衛生研究所10名・中核市保健所4名の合計16名であった。[伊藤健一郎・西尾治・荒川英二(細菌1部)・佐多徹太郎(感染病理部)・神ノ田昌博(結核感染症課)・原田誠(横浜検疫所輸入食品検査センター)・松崎充宏(日本海事検定協会理化学分析センター食品衛生チーム)・新井めぐみ(雪印乳業食品衛生研究所)・浅尾努・河合高生(大阪府公衆衛生研究所)・島田俊雄(日本食品油脂検査協会)・沖津忠行(神奈川県衛生研究所)]

#### 4. 国立保健医療科学院による特別課程ウイルスコースの実施

国立保健医療科学院による特別課程ウイルスコースとして、平成14年10月29日から11月29日に当感染研村山分室で研修会を実施した。ウイルス学、免疫学および分子疫学等について体系的な理解と新しい知見・ウイルス診断技術を習得することを目的とし、地方衛生研究所でウイルスに関する業務につく20名が参加した。本研修は感染症研究所の全ての部、センターの協力、支援によって遂行された。[西尾治、伊藤 健一郎]

5. 情報センターの業務の一環として11月から3月までのあいだ週末を除く連日インフルエンザホットラインを担当し、一般、医療機関、行政機関からの問い合わせに対応した。[木村幹男、大山卓昭、砂川富正、重松美加、谷口清州、多屋馨子、小坂健、岡部信彦、鈴木里和、島田靖、逸見佳美、森伸生、吉田英樹]

#### 6. FIFA ワールドカップにおける症候群サーベイランスと危機管理体制の整備

FIFA ワールドカップが日本と韓国の共催で2002年5月31日から6月30日まで開催され、大会期間中の大規模感染症対策のひとつとして、感染症集団発生の早期探知と対応を目的とした「症候群サーベイランス」を実施し、技術的支援として、毎日のデータ解析、データ管理、緊急時対応体制の整備を行った。[木村幹男、大山卓昭、砂川富正、重松美加、谷口清州、多屋馨子、岡部信彦、鈴木里和、島田靖、逸見佳美、森伸生、吉田英樹]

#### V. 感染症の疫学等の研究

##### 1. インフルエンザによる超過死亡の分析

インフルエンザ流行が我が国の人口動態に与える影響を、インフルエンザによる超過死亡の分析によって評価した。

1999/2000 シーズンの超過死亡は13,846人と多かったものの、2000/01 シーズン913人、2001/02 シーズン1,078人と2シーズンは少なかった。しかしながら、2002/03 シーズンは比較的大きな流行を経験し、超過死亡は11,215人を記録した。[谷口清州、大日康史(大阪大学社会経済研究所)、井伊雅子(横浜国立大学)]

##### 2. インフルエンザ関連死亡迅速把握に関する研究

13大都市でのインフルエンザ関連死亡(インフルエンザ及び肺炎死亡)数から超過死亡モデルを作成し、超過死亡を早期に把握できるか検討した。13大都市における死亡の状況は国全体とよく相関し、インフルエンザにおける超過死亡の早期警戒に有用と考えられた。[谷口清州、大日康史(大阪大学社会経済研究所)、NEC、厚生労働省健康局結核感染症課、13大都市・特別区衛生主幹部局]

##### 3. 大規模感染症発生時における行政機関、医療機関等の間の広域連携に関する研究

大規模イベントなどバイオテロ発生の蓋然性上昇時に行うための症候群サーベイランスの手法を研究し、具体的なシステムの提案と早期に異常を検知するアルゴリズムの検討を行った。米国CDCとの協力で、Drop-in method が応用可能であることが判明した。[鈴木里和、大日康史(大阪大学)、谷口清州]

##### 4. 国内での発生が稀少のため知見が乏しい感染症対応のための技術的基盤整備に関する研究

世界から根絶された天然痘がバイオテロに使用されるかもしれないという危惧から、天然痘によるアウトブレイク発生時での対応体制について検討した。特にワクチン接種の際のワクチン説明、インフォームド Consent 用のビデオを作成した。[谷口清州、岡部信彦]

##### 5. インフルエンザ脳炎脳症疫学研究

インフルエンザ脳炎脳症はここ数年間特に日本の小児において増加しており注目されている疾患である。その実態を調査す

厚生科学研究研究班(森島班)の分担研究として、日本の疫学調査を実施し、患者発生、血清疫学調査、ウイルス分離状況に関して報告した。[岡部信彦、山下和予、齊藤剛仁、吉川昌江、大山卓昭、谷口清洲、多屋馨子]

6. わが国におけるエンテロウイルス感染症の疫学研究  
重症エンテロウイルス脳炎の疫学的ウイルス学的研究ならびに臨床的対策にする研究(岩崎班)の分担研究3年目として、わが国における疫学的調査をまとめる部分を担当した。全国の小児科医療機関を対象に2000-2002年のEV71感染症流行時における重症患者発生状況を調査することになり、アンケート調査を実施した。[多屋馨子、岡部信彦]

7. 気管支喘息の発症や喘息症状の増悪に及ぼすウイルス感染の影響と治療の効果に関する研究  
上記厚生科学研究研究班(飯倉班)の分担研究としてわが国のインフルエンザの疫学調査を報告した。2000/2001シーズンのインフルエンザの流行規模について、累積患者報告数、年齢階級別報告数、患者から分離、検出されたウイルス報告数、その種類、シーズン前の国民のワクチン株に対する抗体保有状況について調査した。これらの疫学調査成績と気管支喘息発症調査成績を相互に検討することによって、ウイルス感染症と気管支喘息発症の関係に関して明らかにすることを目的として研究を実施した。[岡部信彦、多屋馨子、新井 智、山下和予、齊藤剛仁、吉川昌江]

8. ビブリオバルニフィカスの魚貝類における実態調査  
近年問題となっているビブリオバルニフィカス感染症の実態を把握するために5つの地研と協力して、毎月魚貝類におけるビブリオバルニフィカス及び腸炎ビブリオの定量的なデータを収集し解析を行った。[小坂 健、岡部信彦、田村和満(細菌部)、荒川英二(細菌部)、春日文子(国衛研)、山本茂貴(国衛研)、斉藤紀行(宮城県保健環境センター)、山井志朗(神奈川県衛生研究所)、杉山寛治(静岡県環境衛生科学研究所)、宮坂次郎(熊本県保健環境科学研究所)、甲斐明美(東京都立衛生研究所)]

9. 動物由来感染症対策としての新しいサーベイランスシステムの開発に関する研究

2000年に日本では初めて動物園の展示動物を原因とした動

物由来感染症のヒトの集団発生が確認され、動物展示施設においても十分な感染症対策の必要性が明らかになった。そこで動物展示施設における感染症対策ガイドラインとして「人と動物由来の共通感染症ガイドライン」の作成を行った。[岡部信彦、新井 智、大山卓昭、安藤 正樹(神奈川県東部家畜保健衛生所)、多田 有希(川崎市)、中島 一敏(大分医科大学微生物学講座、FETP)、成島 悦雄(東京都上野動物園)、福本 幸夫(広島市安佐動物公園長)、藤井逸人(京都市、FETP)、山田章雄(獣医科学部)]

10. 動物由来感染症対策のサーベイランスの関連として、動物およびそれ由来の製品輸入時におけるリスク評価を検討する目的で、獣医科学部と協力し、オーストラリア農水林業省 Biosecurity Australia 編纂の「輸入リスク分析指針(Guidelines for Import Risk Analysis)」の注釈付き翻訳の作成を行った。[岡部信彦、神山恒夫(獣医科学部)、重松美加]

11. 保育園における感染症実態のコホート研究  
子ども過程総合研究事業の中で、保育園における感染症実態のコホート研究を行った。福井県および横浜市の保育園2園よりインターネット上のデータベースを通して園児全員の感染症に関わる健康状態を日々把握した。事前の予防接種実施状況、園内の衛生状況の観察を行い、インフルエンザ等実際の感染症発生時には早期の介入を行なった。[砂川富正]

12. 港湾、空港におけるベクターサーベイランスに関する研究  
近年のウエストナイル熱の米国での流行を受けて、ねずみ族、蚊族の各港湾、空港におけるサーベイランスの見直しが始まっている。検疫所研究の一環として調査を行い、発生国から到着する各港湾、空港毎のリスクの評価を行なった。[砂川富正]

13. インフルエンザ迅速検査サーベイランスの実施  
全国の小児科医が参加する複数のメーリングリストを通して、2000-01シーズンよりインフルエンザ迅速診断検査結果に関する自主的なサーベイランスを行なっている。インターネット上のデータベースの構築、サーバーの管理等は、滋賀県の西藤成雄医師が行った。2002-03シーズンは約3万件の情報が寄せられた。迅速性において優れたサーベイランスとして定着している。[砂川富正]

VI 予防接種、薬剤等に関連した研究

1. 流行予測調査事業に関する業務

1) 感染症流行予測調査報告書の作成

感染症流行予測調査報告書の作成: 厚生労働省健康局結核感染症課および感染研関係各部と共同で、平成 13 年度(2001 年度)報告書を作成した。

2) 感染症流行予測調査結果速報の発信

平成 14 年度感染症流行予測調査のうち、A) 全国日本脳炎ブタ情報(感染症流行予測調査-速報)を 7 月 10 日から 11 月 27 日まで毎週(計 17 週)速報として HP 上に公開した。B) 全国インフルエンザ抗体保有状況調査速報を 10 月 30 日から 1 月 30 日まで計 4 回速報として HP 上に公開した。

3) 感染症流行予測調査実施要領の作製

厚生労働省健康局結核感染症課と共同で平成 14 年度版を作製した。

4) 感染症流行予測調査事業 PR 用パンフレット

(平成 14 年度版)の作製各都道府県に配布すると共に HP 上に公開した。

5) オンライン入力システムの改訂、検証

都道府県からの結果送付用のシステムおよび集計システムを改訂、検証した。

6) 感染症流行予測調査結果をデータバンクに保存した。

7) 感染症流行予測調査事業検査術式(改訂版)を国立感染症研究所感染症流行予測調査事業委員会および厚生労働省結核感染症課との合同で作製した。

8) 事務局業務

厚生労働省健康局結核感染症課、都道府県、都道府県各衛生研究所、国立感染症研究所各疾患担当部との密接な連携を保つための業務を行った。[多屋馨子、新井 智、早川丘芳、北本理恵、長谷川斐子、岡部信彦]

2. 肺炎球菌の標準的抗体価測定法の確立

昨年度作製した ELISA 法の有効性を判定するため、健常者のワクチン接種前後の抗体価の測定と慢性呼吸器疾患患者の抗体価の測定を行った。その結果、ボランティアに対してはワクチン接種によって抗体価が良好に上昇していることを確認することが可能となった。慢性呼吸器疾患患者についても有効な抗

体測定方法であることが明らかになった。[新井 智、高橋透(万有製薬)、斉藤剛(BML)、高野昇一(BML)、大石和徳(長崎大学熱帯医学研究所)、岡部信彦]

3. 血清銀行に関する業務

1) 血清の保管

感染症流行予測調査事業のため各都道府県において収集された血清の一部を国内血清銀行に受け入れ、保管した。平成 13 年採血分として平成 14 年度に受け入れた血清は、計 4,007 本であった。また、平成 14 年職員血清として計 496 本の血清を受け入れ保管した。

2) 研究目的での血清の払い出し

5 件の研究に対して払い出し依頼があり、年度内に 5 件の研究に対して計 1,558 本の払い出しを行った。

3) 血清銀行運営委員会設立準備(事務局担当)

血清銀行運営委員会を正式に委員会として立ち上げるための準備、事務局担当を行った。

4) 保管血清の管理を行った。[多屋馨子、新井 智、早川丘芳、岡部信彦]

4. 電話、メールによる問い合わせ業務

予防接種、人獣共通感染症、その他感染症に関する電話、メールによる問い合わせに対応した。年間の問い合わせ件数は電話約 350 件、メール約 50 件である。[多屋馨子、新井 智]

5. 予防接種情報公開に関する業務

感染症情報センターHP 内に日本の予防接種スケジュール 2002 を公開した。[多屋馨子、新井 智、松岡静香、岡部信彦]

6. 日本ワクチン学会ニュースレター

ニュースレター事務局業務を行った。著者への連絡、原稿収集、ワクチン関連トピックスを担当し、その原稿を作成した。[多屋馨子、岡部信彦]

7. 予防接種後副反応・健康状況調査検討会

上記委員として、調査解析に参加した。[多屋馨子、岡部信彦]

8. 熱帯病・寄生虫症治療のための国内未承認薬の確保・供給

平成13年度から開始された創薬等ヒューマンサイエンス総合

研究事業「熱帯病に対するオーファンドラッグ開発研究」班(主任研究者:大友弘士)の主要な活動として、熱帯病や寄生虫症に対する治療薬剤で、国内で認可されていないが必要なものを許可を得て輸入し、全国22ヶ所の保管機関に配付し、それらの機関を通じて薬剤入手を可能にする体制を構築し、運営してきた。そして、これらの国内未承認薬へのアクセスを容易にすることを目的に、研究班のホームページを立ち上げた。

また、国内で広く抗マalaria薬を適正に使用できるようにするために、マalaria治療研修会も開催した。さらには、国内で発生したマalaria患者の詳細を把握し、今後の対策に役立てるために、約1,800の医療機関を対象にしたアンケート調査を実施した。

平成14年度の最後には、懸案であった「寄生虫症薬物治療の手引き 2003年改訂第5版」を発行し2,000部印刷して関係機関・関係者に広く配付した。また、研究班のホームページからPDF版でダウンロードできるようにもした。[木村幹男]

#### 9. トラベラーズワクチンの実態と必要性・有効性に関する研究

国際医療協力研究委託事業 海外旅行者の健康管理及び疾病予防に関する研究班(岡部班)の分担研究2年目として、接種の実態の把握、接種後副反応調査、接種後抗体価(A型肝炎、破傷風)の測定について研究した。[多屋馨子、橋本迪子(東京検疫所)、高崎智彦(ウイルス1部)、宮崎寛(日本航空)、藤井達也(陸上自衛隊幕僚監部)、岡部信彦]

#### 10. 安全なワクチン確保とその接種方法に関する総合的研究

厚生科学研究研究班(竹中班)の分担研究として、日本脳炎については、過去20年間のデータを用いて日本脳炎自然感染率を解析し、現在も引き続き日本脳炎ウイルス自然感染が存在していることが明らかになった。また、麻しんワクチン、風しんワクチン、MMR ワクチンの年齢別接種率を算定し今後の麻疹対策、風疹対策に寄与することを目的として解析を実施した。[岡部信彦、多屋馨子、新井智、早川丘芳、北本理恵、高崎智彦(ウイルス第1部)、倉根一郎(ウイルス第1部)、稲松孝思(東京都老人医療センター)]

#### 11. 麻疹輸出のモデル解析

日本では毎年数十万人の麻疹患者の発生が確認され、感染者が発症前に渡航し、海外へ麻疹を輸出する危険性が指摘されてきた。そこで、2002年のワールドカップにおける人口流動を用いて麻疹輸出危険モデルを作成し、日本国内で麻疹に感染し、海外へ麻疹を輸出する危険性を検討した。[高橋央、田中毅、多屋馨子、新井智、長谷川斐子、岡部信彦]

#### 12. 地域における麻疹対策への関与

沖縄はしか"0"プロジェクト委員会への参加、沖縄県具志川市における麻疹対策等に外部委員として積極的に関わっている。[砂川富正]

#### 13. 通常時の麻疹ワクチン接種指針および麻疹発生時の対応指針の作成

厚生労働科学研究費補助金「成人麻疹の実態把握と今後の麻疹対策の方向性に関する研究」の中で、特に実地医家向けの麻疹ワクチン接種指針、自治体その他公衆衛生担当者向けの麻疹発生時の対応指針を作成した。麻疹ワクチン接種については特に別刷りとして関係者に配布されることとなっている。[砂川富正]

#### 14. 黄熱ワクチンの副反応に関するコホート研究

感染症および感染症対策の国際的動向に関する研究の一環として、横浜検疫所、東京検疫所、成田空港検疫所において接種された黄熱ワクチン(4ヶ月間、対象者921人)の副反応に関するコホート研究を行った。副反応発生に関わるリスク要因として、食物アレルギー、卵アレルギー、薬剤アレルギーの既往が有意に関連していることが示された。[砂川富正]

#### 15. 成人麻疹の実態把握と今後の麻疹対策の方向性に関する研究

厚生科学研究研究班(高山班)の分担研究として国単位の疫学調査である感染症発生動向調査ならびに感染症流行予測調査成績を集計・解析し、最近の麻疹流行の実態と日本における健常者の血清疫学調査を報告すると共に、国内での麻疹対策に資することを目的に研究を実施した。[岡部信彦、多屋馨子、砂川富正、森伸生、中島一敏(大分医科大学微生物学)、安井良則(堺市保健所)、谷口清州、知念正雄(知念小児科医院)、富樫武弘(市立札幌病院)、西本靖男(高知県)、山口亮(網

走保健所)

#### 16. 高齢者における麻疹抗体保有状況

従来終生免疫と言われていた小児に好発するウイルス感染症(麻疹)に対する免疫が、高齢化社会に伴い、罹患後 60 年～90 年以上経過した時点でどの程度維持されているかを検討し、現在青壮年期にある人の抗体価と比較検討した。[多屋馨子、稲松孝思(東京都老人医療センター)、岡部信彦]

### VII 病原体の病態及び診断に関連した研究

#### 1. アデノウイルスの診断法の開発

(PCR 法によるアデノウイルス血清型の同定)

前年度に報告したヒトアデノウイルス B および D 亜属それぞれのヘキソン、ファイバー遺伝子にプライマーを設計し、PCR-制限酵素切断法(REA)およびマルチプレックス PCR 法により血清型同定を試みた。広島市および宮崎県で分離された流行性角結膜炎患者の検体を、B および D 亜属全ての型に共通なプライマーを用い増幅した産物を Hinf I, Rsa I, Bsr I, Dde I で切断した。また、B、D 亜属の血清型に特異的なプライマーを設計し、それぞれ一本のチューブに混入し PCR を行った。この結果広島市から、中和反応で 8 型と同定されたが、ヘキソン領域が 9 型に近い分離株、宮崎県からは、11 型であるがヘキソンが 35 型に近い株が同定できた。これらは組換えによって生じたと考えられるが、単純で迅速な血清型同定法は様々な臨床現場や疫学調査で、重要なアデノウイルスの型決定に有用であることが示された。[アディカリ アルンクマー、向山 淳司、松野 重夫、稲田 敏樹、岡部 信彦]

#### 2. 腸管付着性大腸菌

付着性大腸菌の病原性はまだ明快ではない。また、食品の本菌による汚染状況の調査もほとんどされていない。そこで、本菌群の病原性検査法の確立と汚染状況を把握することを目的とした。

##### 1) 局在性及び凝集性付着大腸菌の検査法

局在性、凝集性及び拡散性付着性大腸菌の病原関連遺伝子 13 種類を検査できるようにした。従来法より簡便で迅速な生物活性測定法を検討した。結果は(1)血清型及び *eae* 遺伝子型により付着性関連遺伝子に変異又は脱落があること、(2)コンタクトヘモリシス法を用いた生物活性は増菌培地による影響を受けていた。*eae* 遺伝子型の 及び は生物活性が測れたが、

O157 を含む はまだ測定できない。この型の生物活性の発現に必要な因子を検討する必要がある。[伊藤健一郎・岡本その子(栃木県保健環境センター)]

##### 2) 食品の細菌汚染状況の調査

食品の汚染状況を調べた。対象は漬物及び生鮮野菜である。漬物では、白菜・キュウリ等を主原料とする食品 43 件を調べた。検査法は一般性菌数・大腸菌群に加え、付着性大腸菌等も調べた。大腸菌は糞便性大腸菌の公定法に加えて食中毒検査に使用する検査法も行った。漬物では、付着性大腸菌及びサルモネラは全て陰性であった。大腸菌は公定法による 44.5 培養検査では 4 件(9.3%)、食中毒検査法では 8 件(18.6%)から検出された。一般細菌数は、 $10^3 \sim 10^8$ /g の範囲で検出された。また、セレウス菌グループは 23 件(53.5%)から検出され、下痢性毒素も検出された。生鮮野菜としては、市販のねぎ・きゅうり・ほうれん草の計 31 検体を調べた。検査法は出血性大腸菌の検査法を主として行った。生鮮野菜からは病原菌は検出されなかった。[伊藤健一郎・森屋一雄(佐賀県衛生薬業センター)・松崎充宏(日本海事検定協会理化学分析センター食品衛生チーム)]

#### 3. リアルタイム PCR (SmartCycler) による迅速診断法の開発

##### 1) チフス菌・パラチフス菌

対象とした遺伝子は、チフス菌では Vi 抗原の合成に関与する *vipR* とパラチフス菌は O 抗原構成単糖の合成に関与する *tyv* である。検出法は異なる蛍光標識したタックマンプローブを用い、マルチプレックスで行える。[伊藤健一郎・広瀬健二(細菌 1 部)]

##### 2) チフス菌・パラチフス菌の薬剤耐性の検査

対象とした遺伝子は *gyrA* で、変異部分にプライマーを設計し、共通のプローブを使用する方法と、共通のプライマーを使用して変異部分にプローブを用いる方法を試した。タックマンプローブ法を用い、後者では LUX プライマーを使用した Tm 値の測定法やモルキュラービーコン法も試した。どの方法でもワイルドと変異体を鑑別することはできた。変異位置の特定が難しく、クロスが見られるなど改良点が残っている。[伊藤健一郎・広瀬健二(細菌 1 部)]

##### 3) 黄色ブドウ球菌

対象とした遺伝子はエンテロトキシン A 型から E 型である。検出法はタックマンプローブ法を用いた。クロスが見られるなど改良点が残っている。[伊藤健一郎・森屋一雄(佐賀県衛生薬業セ

ンター)]

4. ヒトバベシア原虫を含む不明熱疾患の解析

ヒトバベシア原虫は、ヒトの不明熱疾患の原因病原体として明らかになっている。そこで、ダニ媒介性疾患の発生が多く報告のある千葉県や鳥根県のヒト血清についてヒトバベシア原虫やその他の病原体について間接蛍光抗体法や PCR によって感染の有無を調査した。[新井 智、辻 正義(酪農大)、海保郁男(千葉衛研)、板垣朝夫(鳥根環境研)、田原研司(鳥根環境研)、石原智明(酪農大)、岡部信彦]

5. ヘルペス科ウイルス検出(HHV-6,HHV-7)に関する研究

不明熱、不明発疹を呈した患者から得られた臨床検体を基に、ヘルペス科ウイルス(HHV-6,HHV-7)の検出(ウイルス分離、DNA 検出)、HHV-6,HHV-7 IgG 抗体価および IgM 抗体価の測定を実施した。[多屋馨子、山本あつ子(三井記念病院)、飯谷秀美(いいたに小児科医院)]

6. ウイルス性下痢症診断マニュアル(第三版)作成

酵素抗体法による A 群ロタウイルスの G 血清型別、ノロウイルスの RT-PCR 法、アデノウイルスを担当した。[西尾治]

7. 学校等で流行するウイルス感染症の早期診断法の確立と防止法の樹立

文部科学省科学研究研究班として、学校保健で問題となるア

デノウイルスによるプール熱等の呼吸器感染症、エンテロウイルス 71 型による中枢神経感染症を併発した手足口病の迅速診断法の開発およびノロウイルスによる予防策に取り組んだ。

[西尾治、藤本嗣人(兵庫県立健康環境科学研究センター)]

8. 乳幼児下痢症の原因ウイルス検出法に関する研究

創薬等ヒューマンサイエンス総合研究事業研究班として、4 種類の下痢症ウイルスを同時に検出できるキットの開発を目的とし、昨年度構築した A 群ロタウイルスとアストロウイルスを同時検出するキットの評価を調査し、新たにアストロウイルスの検出について検討した。[西尾治、大瀬戸光明(愛媛県立衛生環境研究所)、天辻康夫(国際試薬)、一口毅(国際試薬)]

9. 食品中の微生物汚染状況の把握と安全性の評価に関する研究

厚生労働科学研究食品・化学物質安全総合研究事業研究班として、食品の安全性評価のために、国産市販カキ、輸入魚介類におけるウイルス汚染状況を明らかに、**食品の安全性の確保に努めた。**[西尾治]

10. 厚生労働省薬事・食品衛生審議会臨時委員(乳肉水産食品部会)の委嘱を国より受けた。[西尾治]

・ 検査実施状況

	行政	研究	合計
ウイルス分離同定	1	6	7
核酸・抗原検出	2	189	191
血清反応	0	432	432
合計	3	627	630

平成 14 年度研究員・研究生

氏 名	身 分	期 間	出 身
中村明子	客員研究員	H9.4.1-	東京大学
金澤保	客員研究員	H10.7.1-	産業医科大学
樋口薫	協力研究員	H11.6.1-	自宅開業
小松崎眞 (元 FETP)	協力研究員	H11.9.1-	東京慈恵会医科大学
砂川富正 (元 FETP)	協力研究員	H11.9.1- H14.8.31	横浜検疫所
中瀬克己 (元 FETP)	協力研究員	H11.9.1-	岡山市保健所
中島一敏 (元 FETP)	協力研究員	H11.9.1-	国立大分医科大学
藤井逸人 (元 FETP)	協力研究員	H11.9.1-	京都市役所
加來浩器 (FETP)	協力研究員	H12.9.1-	陸上自衛隊衛生学校
松井珠乃 (FETP)	協力研究員	H12.9.1-	健康保険天草中央病院
田中毅 (FETP)	協力研究員	H12.9.1-	福岡検疫所
鈴木里和 (FETP)	協力研究員	H13.9.1-	医師
大日康史	客員研究員	H11.9.1- H14.8.31	大阪大学
井伊雅子	客員研究員	H11.9.1- H14.8.31	横浜国立大学
根路銘国昭	客員研究員	H13.2.1- H15.1.31	バイオメディカルサイエンス研究会
浦島充佳	協力研究員	H12.12.1- H14.11.30	東京慈恵会医科大学
奥村順子	協力研究員	H12.12.1-	東京大学
松永泰子	協力研究員	H13.5.1-	元職員
Arun Kumar Adhikary	協力研究員	H13.5.1-H15.4.30	日本学術振興会
藤井達也	協力研究員	H13.7.1-	陸上自衛隊
川上桂子	協力研究員	H14.2.1-	国立公衆衛生院
安井良則	協力研究員	H14.3.1-	大阪府堺市保健所
John M. Kobayashi	客員研究員	H13.7.1- H15.2.28	ワシントン州保健局
長谷川斐子	客員研究員	H14.4.1-	元職員
逸見佳美	協力研究員	H14.4.1-	陸上自衛隊
島田靖	協力研究員	H14.4.1-	日本医科大学
吉田英樹	協力研究員	H14.4.1-	医師
森伸生	協力研究員	H14.4.1-	医師
Tsai Kuang chau	協力研究員	H14.4.1-H15.3.31	国立台湾大学
重松美加	流動研究員	H14.4.1-H15.3.31	(財) HS 財団
Richard Scott Bermudez	協力研究員	H14.7.2-H14.8.22	ハ-バ-ド大学
寺村知子	協力研究員	H14.7.1-	京都市衛生公害研究所
斎藤章暢	協力研究員	H14.7.1-	埼玉県衛生研究所
Urmila Banik	協力研究員	H14.10.1-	チタゴンク大学
日谷明裕	協力研究員	H15.1.1-	医療法人社団愛友会流山総合病院
佐藤弘	協力研究員	H15.2.1-	酪農学園大学
山口卓	協力研究員	H15.2.1-	(財) 日本冷凍食品検査協会

## 発表業績一覧

## I. 誌上発表

## 1. 欧文発表

## 原著

- 1) Arai, Y.T., Kimura, M., Sakaue, Y., Hamada, A., Yamada, K., Nakayama, M., Takasaki, T., Kurane, I.: Antibody responses induced by immunization with a Japanese rabies vaccine determined by neutralization test and enzyme-linked immunosorbent assay. *Vaccine* 20:2448-2453, 2002
- 2) Doan, L-T-P., Okitsu, S., Nishio, O., Pham, D-T., Nguyen, D-H., Ushijima, H. Epidemiological features of rotavirus infection among hospitalized children with gastroenteritis in Ho Chi Ming City, Vietnam. *J Med.Virol.* 69:588-94, 2003
- 3) Fujimoto, T., Chikahira, M., Yoshida, S., Ebara, H., Hasegawa, A., Totsuka, A., and Nishio, O. Outbreak of Central Nervous System Disease Associated with Hand, Foot, and Mouth Disease in Japan during the Summer of 2000 : Detection and Molecular Epidemiology of Enterovirus 71. *Microbiol.Immunol.* 46:621-627,2002
- 4) Arun Kumar Adhikary, Jiro Numaga, Toshikatsu Kaburaki, Hidetoshi Kawashima, Makoto Araie, Yoshifumi Ikeda, Takeo Ogino, Hideaki Shimizu, Eiko Suzuki, and Hiroshi Ushijima. Genetic Characterization of Adenovirus Type 8 (Ad8) isolated in Hiroshima City over a 15-year period. *Journal of Clinical Pathology.* 2003; 56:120-125.
- 5) K. Adhikary, Jiro Numaga, Eiko Suzuki, and Hiroshi Ushijima, Atsushi Mukoyama, Toshiki Inada, Nobuhiko Okabe. Identification of hexon and fiber gene of a novel strain adenovirus isolated from the cases of EKC. *Journal of Clinical Pathology.* 2003 (In press).
- 6) Kimura, M., Suzaki, A., Matsumoto, Y., Nakajima, K., Wataya, Y., Ohtomo, H.: Epidemiological and clinical aspects of malaria in Japan. *J. Travel Med.,* 10:122-127, 2003
- 7) Kondo K, Shimada K, Sashihara J, Tanaka-Taya K, Yamanishi K. Nucleotide, Protein Identification of human herpesvirus 6 latency-associated transcripts. *J Virol.* 76(8):4145-51. 2002
- 8) M.Sakaguchi, T.Nakayama, H.Kaku, K Taniguchi, S.Saito, A.Kimura, S.Inouye. Analysis of HLA in children with gelatin allergy. *Tissue Antigens* 59:412-416, 2002.
- 9) Matsuzawa, A., Shimizu, M., Takeda, Y., Nagase, H., Sayama, K., Kimura, M.: Significant role of Fas ligand-binding but defective Fas receptor (CD95) in lymph node hyperplasia composed of abnormal double-negative T cells. *Immunology* 106:470-475, 2002
- 10) Ono J, Imai K, Tanaka-Taya K, Kurahashi H, Okada S. Decreased frequency of seizures in infantile spasms associated with lissencephaly by human herpes virus 7 infection. *Pediatr Int.* 44(2):168-170. 2002
- 11) Osaka K, Takahashi H, Ohyama T. Testing a symptom-based surveillance system at high-profile gatherings as a preparatory measure for bioterrorism. *Epidemiol. Infect.* 129: 429-434, 2002
- 12) Sashihara J, Tanaka-Taya K, Tanaka S, Amo K, Miyagawa H, Hosoi G, Taniguchi T, Fukui T, Kasuga N, Aono T, Sako M, Hara J, Yamanishi K, Okada S. High incidence of human herpesvirus 6 infection with a high viral load in cord blood stem cell transplantation recipients. *Blood.* 15;100(6):2005-11, 2002
- 13) Shigematsu, M., Davison, K.L, Crowcroft, N.S.: National Enhanced Surveillance of Meningococcal Disease in England, Wales and Northern Ireland, January 1999 to June 2001. *Epidemiology & Infection* 129:459-470, 2002
- 14) Sugimoto T, Tanaka-Taya K, Ono J, Miyoshi H, Okada S, Yamanishi K. Human herpesvirus-6 infection in neonates: Not protected by only humoral immunity. *Pediatr Int. Jun;*44(3):281-285. 2002

- 15) Tamano Matui, et al. Evaluation of National  
Tsutsugamushi Disease Surveillance - Japan 2000.  
Japanese Journal of Infectious Disease  
2002;55:197-203
- 16) Tanaka H, Nishimura T, Hakui M, Sugimoto H,  
Tanaka-Taya K, Yamanishi K. Human herpesvirus  
6-associated hemophagocytic syndrome in a healthy  
adult. Emerging Infectious Diseases. 8(1):87-8.  
2002
- 17) Thawaranantha D, Chimabutra K, Balachandra K,  
Warachit P, Pantuwatana S, Tanaka-Taya K, Inagi R,  
Kurata T, Yamanishi K. Genetic variations of human  
herpesvirus 7 by analysis of glycoproteins B and H  
and R2-repeat regions. Journal of Medical Virology.  
66(3):370-7.2002
- 18) Tokimasa S, Hara J, Osugi Y, Ohta H, Matsuda Y,  
Fujisaki H, Sawada A, Kim JY, Sashihara J, Amou K,  
Miyagawa H, Tanaka-Taya K, Yamanishi K, Okada  
S. Ganciclovir is effective for prophylaxis and  
treatment of human herpesvirus-6 in allogeneic  
stem cell transplantation. Bone Marrow Transplant.  
Apr;29(7):595-8. 2002
- 19) Yamamoto, Y., Takasaki, T., Yamada K., Kimura,  
M., Washizaki, K., Yoshikawa, K., Hitani, A,  
Nakamura, T., Iwamoto, A.: Acute disseminated  
encephalomyelitis following dengue fever. J. Infect.  
Chemother., 8:175-177, 2002
2. 和文発表  
原著・総説・解説
- 1) 木村幹男: 英国のマラリア予防ガイドラインの特徴と変遷.  
熱帯 35:31-38, 2002
- 2) 木村幹男: 抗マラリア薬. 塩酸メフロキン. 臨床と薬物治  
療 21:411-413, 2002
- 3) 木村幹男: マラリアにおける診断と治療の現況. 感染症  
学雑誌 76:585-593, 2002
- 4) 木村幹男: コレラワクチンの現況. 病原微生物検出情報  
23:227, 2002
- 5) 木村幹男: 旅行医学における理論と実践の特徴. 日本検  
疫医学会誌 4:8-16, 2002
- 6) 古田隆久, 菊地たかね, 木村幹男, 渡辺直照: [特集.  
IgE-マスト細胞の役割を問い直すために] マラリア感染防  
御とIgE. アレルギー科 14:114-119, 2002
- 7) 木村幹男, 重松美加, 川上桂子: 第4回アジア太平洋旅  
行医学会議に参加して. 日本醫事新報 No. 4109:27-30,  
2003
- 8) 田中毅ら. ドイツのウイルス性出血熱輸入例対策. 日本  
公衆衛雑誌 2002;49(6):564-72
- 9) 松井珠乃ら. 熊本県におけるツツガムシ病の診断・報告  
の現状. 日本皮膚科学会雑誌 2002;112(9):1253-55
- 10) 高橋央ら. サッカーワールドカップに伴う症候群サー  
veys評価. 感染症学雑誌 2002;76(2):102-8
- 11) 松井珠乃ら. G8福岡・宮崎サミット2000に伴う症候群サー  
veys評価. 感染症学雑誌 2002;76(3):161-6
- 12) 砂川富正, 安井良則. 麻疹 - 最近の国内外の状況と今  
後の対策 -. 保健婦雑誌 58(4): 348-353, 2002.
- 13) 砂川富正. 麻疹ワクチンの乳児の早期接種. 治療増刊号  
84: 650-652, 2002.
- 14) 砂川富正. ペスト, 天然痘. 小児科診療 65(12):  
2046-2050, 2002.
- 15) 砂川富正. 感染性胃腸炎とは. 小児看護 26(2):  
174-181, 2003.
- 16) 谷口清州, 岡部信彦. 国際的に問題となるウイルス性脳  
炎. 臨床とウイルス 30(4), 249-254, 2002.
- 17) 谷口清州. 感染症のアウトブレイクに対する新しい取り組  
み. 公衆衛生情報 32(12), 15-17, 2002.
- 18) 谷口清州. エボラ出血熱, クリミアコンゴ出血熱, マールブ  
ルグ病, ラッサ熱. 小児科診療 12(27), 2039-2045,  
2002.
- その他
- 1) FAO/WHO (Ken OSAKA et al) Guidelines on  
Exposure Assessment of Microbiological Hazards in Food  
and Water. Draft .2001
- 2) FAO/WHO (Ken OSAKA et al) Joint FAO / WHO  
Expert consultations on Risk Assessment of  
Microbiological Hazards in Foods. -preliminary document  
MRA 01/03
- 3) Editorial Committee of Findings of Infectious Agents in  
Japan: Annual Report on Findings of Infectious Agents in  
Japan, 1998. Jpn. J. Infect. Dis., 52, Supplement, 1999.
- 4)

- 19) 谷口清州. 予防接種:全般、ジフテリア・百日咳・破傷風. 小児科 43(9)1179-1184, 2002.
- 20) 谷口清州. グローバル時代の感染症・世界の驚異. 日本臨床 61 増刊2 16-23, 2003.
- 21) 谷口清州. 感染症情報の予防接種への生かし方. 医報フジ 121 11-17, 2003.
- 22) 谷口清州. 無菌性髄膜炎. 総合臨床 52 増刊 970-975, 2003.
- 23) 谷口清州. 無菌性髄膜炎. 臨床検査 47(3) 313-317, 2003.
- 24) 高橋 央, 多屋馨子, 新井 智, 長谷川斐子, 岡部信彦. サッカーワールドカップ 2002 に伴う麻疹輸出の危険率モデル解析. 感染症学雑誌. 2002. 76: 269-274
- 25) 多屋馨子: 診療科別にみたウイルス感染症 4)小児科ウイルス学から見た医療の安全性 編集:栗村敬 メディカルレビュー社 104-110, 2002
- 26) 多屋馨子: 外来患者の素朴な疑問に応える-家庭でのケアとその指導 Q&A-Part 2 予防接種 ポリオ、麻疹. 小児科 43(9)1185-1191, 2002
- 27) 監修 岡部信彦, 多屋馨子: 予防接種に関する Q&A 集. 社団法人細菌製剤協会 1-81, 2002
- 28) 多屋馨子: インフルエンザウイルスのワクチンをめぐって最近の接種率の動向と供給体制. 内科 90(5):883-888, 2002
- 29) 多屋馨子: 麻疹 小児内科. 34(増刊号), 954-961, 2002
- 30) 岡部信彦, 砂川富正, 谷口清洲, 多屋馨子, 中島一敏, 森伸生, 安井良則: 麻疹の現状と今後の麻疹対策について. 1-61, 2001
- 31) 監修 岡部信彦 R-Book 2000 日本版-小児感染症の手引き- (Section1.能動免疫と受動免疫 能動免疫 翻訳担当:多屋馨子)1-41, 2002
- 32) 多屋馨子:特集 冬から春の感染症マネージメント インフルエンザ:流行予測. 小児科臨床. 55(12), 2189-2199, 2002
- 33) 多屋馨子: 院内のウイルス感染症予防対策 ~ 予防接種とサーベイランスを有効に用いるにはどうしたらいいか? ~愛以外に地球を救う それはワクチン-. 18(1), 49-58, 2002
- 34) 岡部信彦, 森伸生, 砂川富正, 多屋馨子, 谷口清州, 中嶋一敏, 安井良則: 麻疹の征圧は可能かー今、現実に可能なこと、早急に取り組むべきことー. 日本小児科医
- 35) 成松浩志, 小林貴廣, 世古庄太, 後藤祐司, 木元正一, 尾形長彦, 淵 祐一, 伊藤健一郎:と畜場に搬入された豚の糞便中におけるペロ毒素産生性大腸菌(VTEC)の分布と病原性関連因子保有状況調査 食品微生物学雑誌 19(1):21-26, 2002 .
- 36) 小林一寛, 伊藤健一郎他:下痢原性大腸菌における付着因子保有状況とそれに基づく大腸菌検査の一考察. 感染症学雑誌 76(11):911-920, 2002.
- 37) 伊藤健一郎, 松崎充宏:腸管出血性大腸菌 O157 の迅速検査法とその成績の取り扱い 日本臨床 60(6): 1114-1120, 2002
- 38) 古田敏彦, 竹内寛行, 東谷市郎, 西尾治:大アサリの喫食を原因とするノーウォーク様ウイルスとA型肝炎ウイルスによる食中毒事例 浜松市 病原微生物検出情報 23:119-120,2002
- 39) 藤本継人, 近平雅嗣, 宗村徹也, 西尾治, 吉田弘, 武田和子, 吉田真策:脳症患者の咽頭ぬぐい液および髄液から検出された A 群コクサッキーウイルス 兵庫県 病原微生物検出情報 23:174-174,2002
- 40) 西尾治, 秋山美穂, 長谷川斐子, 古屋由美子, 大瀬戸光明, 杉枝正明:輸入生鮮魚介類からの A 型肝炎ウイルス検出状況 病原微生物検出情報 23:274-275,2002
- 41) 近藤玲子, 山下育孝, 吉田紀美, 大瀬戸光明, 浅井忠男, 井上博雄, 西尾治, 秋山美穂:愛媛県において 10 月から流行したノーウォークウイルス様ウイルス胃腸炎 病原微生物検出情報 24:9-10,2003
- 42) 西尾治, 加藤由美子:PCR 産物のマイクロプレートハイブリダイゼーションによるノーウォークウイルスの確認および遺伝子型別について 日本臨床 60(6):1175-1180,2002
- 43) 岡藤輝夫, 岡藤隆夫, 岡藤みはる, 藤本嗣人, 近平雅嗣, 西尾治:スイミングプールを介したと推定されるアデノウイルス 4 型による咽頭結膜熱の流行 臨床とウイルス 30(4): 270-274,2002
- 44) 西尾治, 新川奈緒美:ノーウォーク様ウイルスによる集団発生 日本医事新報 4105:5-9,2002
- 45) 古田敏彦, 秋山美穂, 加藤由美子, 西尾治:ノロウイルス(ノーウォークウイルス)A 型肝炎ウイルスに汚染されたウチムラサキ貝による食中毒事例 感染症学雑誌 77:89-94,2003
- 46) 福田美和, 川田一伸, 矢野拓也, 杉山明, 中山治, 西尾

- 治、関根大正、櫻井悠朗：養殖カキのウイルス浄化試験  
感染症学雑誌 77:95-102,2003
- 47) 田中俊光、西尾治：輸入二枚貝等からのSRSV 遺伝子検出状況 獣医公衆衛生研究 5:15-17,2003
- 48) 入谷展弘、勢戸祥介、春木孝裕、川本尋義、西尾治、久保英幸、村上司、菘城昇次、瀧野薫、小倉壽：河川水からのNorwalk virus の検出 生活衛生 46:137-143,2002
- 49) 入谷展弘、勢戸祥介、春木孝裕、西尾治、久保英幸、村上司、菘城昇次、瀧野薫、綾田稔、小倉壽：リアルタイムPCR法を用いたNorwalk virus 検出法の評価 大阪市立環境科学研究所報告 64:6-10,2002
- 50) 新川奈緒美、永田告治、有馬忠行、本田俊郎、吉國謙一郎、上野伸広、湯又義勝、西尾治：鹿児島県における海域のウイルス汚染実態調査及びウイルス性胃腸炎集団発生事例 鹿児島県環境保健センター所報 3:102-105,2003
- 51) 岡部信彦、加来浩器 テロ勃発時における感染症情報センターの役割 治療 84(4):1311-1316, 2002.
- 52) 岡部信彦. 天然痘(痘瘡) Medical Practice 19(5):892-894, 2002.
- 53) 岡部信彦. 海外における感染症の情報 臨床と研究 79(4):611-614, 2002.
- 54) 岡部信彦. 手足口病と脳炎 特集:母子保健と感染症 母子保健情報 45:40-45, 2002
- 55) 岡部信彦. ポリオ 小児科臨床 Vol.55(増) 1251-1260, 2002.
- 56) 岡部信彦. 学校伝染病の予防とその対策 治療 84(8):2195-2199, 2002.
- 57) 岡部信彦. 予防接種-BCG-小児科 43(9):1192-1194, 2002.
- 58) 岡部信彦. 特集:第一種伝染病とその対応 学校伝染病の概要と危機管理 臨床と微生物 29(5):463-466, 2002.
- 59) 岡部信彦. 生物テロの危機管理と医療従事者特集「医療従事者の危機管理」総合臨床 51(10):2728-2732, 2002.
- 60) 岡部信彦. ジフテリア・百日咳・破傷風特集「医療従事者の危機管理」総合臨床 51(10):2794-2797, 2002.
- 61) 岡部信彦. 感染症サーベイランスによる感染症動向の把握特集「小児の感染症の現況」小児内科 34(10):1449-1452, 2002.
- 62) 岡部信彦. インフルエンザ 特集:内科 100年のあゆみ(感染症)日本内科学雑誌 91(10):2845-2849, 2002
- 63) 岡部信彦. 新興・再興感染症とその対策 特集:感染対策の理論と実際 現代医療 34(11):2624-2629, 2002.
- 64) 岡部信彦. 輸入感染症と感染症法におけるサーベイランス 特集「輸入感染症」小児科診療 65(12):2025-2031, 2002.
- 65) 岡部信彦. インフルエンザ脳炎・脳症 病原微生物検出情報 23(12):310-311, 2002.
- 66) 岡部信彦, 森 伸生, 砂川富正, 多屋薫子, 谷口清州, 中島一敏, 安井良則 麻疹の制圧は可能か-今、現実可能なこと、早急に取り組むべきこと-日本小児科医会会報 24:37-43, 2002.
- 67) 岡部信彦. 動物由来感染症は今なぜ重要か 感染と抗菌薬 5(4):343-347, 2002.
- 68) 岡部信彦. 特集:小児疾患診療のための病態生理 熱帯病 小児内科 34(増刊号):1067-1070, 2002.
- 69) 岡部信彦. 特集:小児疾患診療のための病態生理 コレラ 小児内科 34(増刊号):1080-1083, 2002.
- 70) 岡部信彦. 感染症とからだのしくみ 学校保健フォーラム 58(6):18-22, 2002.
- 71) 岡部信彦. 特集:最新のインフルエンザ診療 今冬の流行予測 内科 90(11):900-903, 2002
- 72) 岡部信彦. 日本の感染症サーベイランス 日本皮膚科学会雑誌 112(13):1683-1685, 2002.
- 73) 岡部信彦. コレラ 小児内科 34(増):1080-1083, 2002.
- 74) 岡部信彦. 熱帯病(出血熱・マラリア・デング熱など) 小児内科 34(増):1067-1080, 2002.
- 75) 岡部信彦. 新世紀の感染症学 グローバル時代の感染症-本邦の現状-日本臨床 61 巻増刊号 2 9-15, 2003.
- 76) 岡部信彦. ライフスタイルの変化と感染症 臨床と薬物治療 22(1):7-10, 2003.
- 77) 岡部信彦. 感染症週報(IDWR)からみる日本の感染症の動向 現代医療 35(1):42-52, 2003.
- 78) 岡部信彦. バイオテロ対策-基本的な知識と対応-Infection Control 12(3)"244-250, 2003.
- 79) 岡部信彦. 世界の感染症と日本の現況 総合臨床 52(増):651-657, 2003.
- 80) 岡部信彦. 予防接種・ワクチン 総合臨床 52(増):676-681, 2003.
- 81) 国立感染症研究所、厚生労働省結核感染症課：病原微生物検出情報、月報 23 巻 4 号-24 巻 3 号。2002-2003
- 82) 予防医学事業中央会：ヒト由来病原体の検出数(統計のペ - ジ)、予防医学ジャーナル、386-397、2002-2003

書籍

- 1) 岡部信彦. 日本の感染症サーベイランス 小児科学 第2版 P.689-693 医学書院 2002.6.
- 2) 岡部信彦. わが国における感染症サーベイランスシステム-感染症情報の収集と還元-感染症研究の新戦略-阿蘇シンポジウム 2001-南山堂 2002.7.
- 3) 中村安秀, 岡部信彦 監修 親と子の海外生活ガイド 母子衛生研究会 2002.3.
- 4) 岡部信彦. 海外旅行者へのワクチン接種アドバイス 新版・感染症マニュアル P.308-325 2002.10. スパイラル出版
- 5) 岡部信彦. 監修・訳 R-Book 2000 -小児感染症の手引き- 日本小児医事出版社 2002.11.
- 6) 岡部信彦・多屋馨子 監修 予防接種に関するQ&A集 細菌製剤協会 2002.8.
- 7) 岡部信彦. ウイルス感染症 わかりやすい疾患と試薬の解説 2003.p.224-227監修・佐藤哲男 アークメディア 2002.12.
- 8) 岡部信彦. アデノウイルス7型感染症 小児の治療指針 第13版 P.842-843 編集・大関武彦, 古川 漸, 横田俊一郎 医学書院 2003.3.
- 9) 岡部信彦. 海外渡航者に同行する小児の予防接種 小児の治療指針 第13版 P.513-515 編集・大関武彦, 古川 漸, 横田俊一郎 医学書院 2003.3.
- 10) 谷口清州. 世界からみた日本の感染症の特殊性. 小児科学第2版 医学書院 685-689 2002.

単行本

- 1) 岡部信彦 ペット感染症が危ない-あなたと動物を守る正しい知識-PHP 研究所 2002.10.
- 2) 岡部信彦 一般病院・診療所における危機的感染症への対応 ユニオンエース(東京) 2002.4.

学会発表

国際学会

1. Suzuki S. et al. Web-based Japanese Syndromic Surveillance for FIFA World Cup 2002. The National Syndromic Surveillance Conference, USA, 2002
2. Tanaka T. et al. A Nosocomial outbreak of *Serratia*

*marcescens* sp. Induced by contaminated heparinized-saline. EIS Conference, USA, 2002

3. Tanaka T. et al. A risk analysis by a measles exportation mode concerning FIFA World Cup 2002 TEPHINET Conference, Spain, 2002
4. K.Taniguchi. Influenza surveillance in Japan. WHO/CDC joint workshop on Epidemiology and Surveillance of Influenza, November 2002, Atlanta, USA.
5. K.Taniguchi. Global infectious disease surveillance and WHO strategy. The 2002 Taiwan International Public Health Workshop, October 2002, Taiwan.
6. K.Taniguchi. Surveillance and control on Tsutsugamushi disease in Japan. The symposium on Strategies for Tsutsugamushi disease prevention, September, 2002, Korea.
7. K.Taniguchi. Surveillance and control of infectious disease in Japan. International Conference on Surveillance for Infectious Diseases, December 2002, Korea.
8. K.Taniguchi. Syndromic Surveillance system in Japan. International Conference on Surveillance for Infectious Diseases, December 2002, Korea.
9. Kinoshita, J., Yamada, H., Minematsu, T., Kimura, M., Ohtomo, H., Kotaki, H.: Evaluation of antimalarial drug cardiotoxicity by using guinea-pig isolated perfused hearts. 3<sup>rd</sup> European Conference on Travel Medicine. Florence, Italy, 2002
10. Kimura, M.: Country Report. A Japanese tropical and parasitic disease network useful for foreign visitors from endemic areas. 4<sup>th</sup> Asia Pacific Travel Health Conference. Shanghai, 2002.
11. Kimura, M., Yamamoto, Y., Takasaki, T., Yamada, K., Washizaki, K., Yoshikawa, K., Hitani, A., Nakamura, T., Iwamoto, A.: Acute disseminated encephalomyelitis following dengue fever and a favorable response to high-dose corticosteroid therapy: report of a case. 4<sup>th</sup> Asia Pacific Travel Health Conference. Shanghai, 2002.

12. Kawakami, K., Kimura, M., Hashimoto, M., Aoki, K., Hamada, M., Tanihata, T.: Knowledge and preparation regarding the risk of malaria among the Japanese international travelers. 4<sup>th</sup> Asia Pacific Travel Health Conference. Shanghai, 2002.
13. Shigematsu, M., Kaufmann, M.E., Charlett, A., Pitt, T.L., Ohnishi, M., Mori, K., Kimura, M., Okabe, N.: Epidemiology of *Plesiomonas shigelloides* among Japanese travelers with diarrhoea. 4<sup>th</sup> Asia Pacific Travel Health Conference. Shanghai, 2002.
14. Kim, H.-S., Wataya, Y., Kimura, M.: DNA diagnosis of malaria using microtiter-plate hybridization method. 4<sup>th</sup> Asia Pacific Travel Health Conference. Shanghai, 2002.
15. Kimura, M.: Infectious disease surveillance in Japan. China-Japan Medical Conference 2002. Beijing, 2002.
16. Yamamoto, J. Iwahori, M. Shigematsu, K. Osaka, H. Toyofuku, F. Kasuga, M. Nishibuchi: Quantitative modeling for risk assessment of *Vibrio parahaemolyticus* in southern Thailand. The 37<sup>th</sup> Joint Conference of US-Japan Cooperative Medical Science Program, Cholera and Other Bacterial Enteric Infections Panel
17. Ken OSAKA Risk assessment of *V. parahaemolyticus* and finfish. Joint FAO/WHO Expert consultations on risk characterization of *Campylobacter* spp. In broiler chickens and *Vibrio* spp. In seafood. 30<sup>th</sup> August 2002.
18. Kishimoto, T., Ogawa, M., Shiga, S., Kurane, I., Tada, Y., Yoshikawa T., Fujii, I., Nakashima, K., Arai, S., Oyama, T., Okabe, N. and Fukushi, H. An outbreak of *Chlamydia psittaci* infection in zoo staff members involved in delivery assistance to a Siberian elk. *Chlamydia Infections Proceedings of the tenth international symposium on human chlamydial infections.* Antalya, Turkey. June 16-22, 2002.
19. Keiko Tanaka-Taya, Nobuhiko Okabe: Laboratory issues for measles control in Japan. Meeting of technical experts on measles (Seoul city, Korea) 2002.4.30-5.2.
20. Arun Kumar Adhikary, Jiro Numaga, Toshikatsu Kaburaki, Hidetoshi Kawashima, Makoto Araie, Eiko Suzuki, Hiroshi Ushijima, Atsushi Mukoyama, Shigeo Matsuno, Toshiki Inada, and Nobuhiko Okabe. Genotyping of Adenoviruses by PCR-REA and Multiplex PCR. Conference of the Japanese Society for Virology. 16-18 October, 2002. Sapporo, Japan.
21. A. K. Adhikary, Jiro. Numaga, Toshikatsu Kaburaki, Hidetoshi Kawashima, Makoto Araie, Atsushi Mukoyama, Eiko Suzuki, and Hiroshi Ushijima, Shigeo Matsuno, Toshiki Inada, Nobuhiko Okabe. Identification of hexon and fiber gene of a novel genome type of adenovirus type 8 (Ad8) isolated from the cases of EKC. Adenovirus workshop, 16 October, 2002. Sapporo, Japan.
22. Genetic Characterization of a Novel Strain of Adenovirus Involved in Epidemic Keratoconjunctivitis (EKC) A. K. Adhikary, Toshiki Inada, Jiro Numaga, Atsushi Mukoyama, Eiko Suzuki, and Hiroshi Ushijima, Shigeo Matsuno, Nobuhiko Okabe. Adenovirus workshop, 6 July, 2003. Osaka, Japan.
23. Ushijima, H., Zhou, Y., Okitsu, S., Zhu, L., Ishihara, K., Nishio, O.: Molecular epidemiological study of diarrheal viruses in Japan from 1996-2000 and gene analysis of rotavirus serotype G9. 4<sup>th</sup> China-Japan International Congress of Virology. Jun.2002, Kun Ming, China
24. Ushijima, H., Li, L., Lan, D.T.P., Okitsu, S., Nishio, O., Seo, J.-K., Sim, J.-G. : Molecular epidemiology of adenovirus among children with diarrhea in Japan, Vietnam, and Korea. 36<sup>th</sup> Joint Meeting Conference on Viral Disease. Aug.2002, Matsumoto
25. Doan, T-P-L., Okitsu, S., Nishio, O., Pham, T-D., Nguyen, H-D., Ushijima, H.: Epidemiological features of rotavirus infection among hospitalized children with gastroenteritis in Ho Chi Minh City, Vietnam. 1<sup>st</sup> Asian Congress of Pediatric Infectious Disease. Nov.2002, Pattaya, Thailand
26. Ushijima, H., Kono, H., Zhou, Y-M., Lan, D-T-P., Peerakome, S., Maneekarn, N., Okitsu, S., Nishio, O.: Recent trend of rotavirus infection in Japan, Thailand and Vietnam. International Congress of Virology. July.2002, Paris
27. Kawamoto, A., Matsumoto, N., Hosoi, T., Nishio, O. Epidemiology investigation of Norwalk virus detected in humans, environment and oysters. International Congress of Virology. July.2002, Paris

28. Ushijima,H., Zhou,Y., Okitsu,S., Zhu,L., Nishio,O.:  
Molecular epidemiology of rotaviruses, especially G9, in  
Japan(1999-2000). 1<sup>st</sup> Asian Congress of Pediatric  
Infectious Disease. Nov.2002, Pattaya, Thailand
2. 国内学会
- 1) 森伸生ら. 茨城県取手氏における小中学校の麻疹ワクチン接種状況. 日本ワクチン学会, 2002 年
  - 2) 森伸生ら. 茨城県での T 中学校麻疹集団発生事例調査. 小児感染症学会, 2002 年
  - 3) 加來浩器ら. 大韓民国におけるマラリア. 日本検疫学会, 2002 年
  - 4) 田中毅ら. 諸外国の人獣共通感染症にかかわる動物及びベクターサーベイランス. 日本検疫学会, 2002 年
  - 5) 砂川富正ら. 「発熱・水泡を有する患者が複数発生し入港したパナマ船の事例」(口演) 日本検疫医学会学術大会, 2002 年, 大阪府
  - 6) 砂川富正. 「未経験の感染症の侵入、発生に対する備えおよび対策」(口演) 関西感染症懇話会, 2002 年, 大阪府
  - 7) 砂川富正. 「世界および日本における麻疹を巡る状況」(口演) 大阪小児科学会, 2002 年, 大阪府
  - 8) 砂川富正. 「健康危機管理に関わる問題とウエストナイルウイルス」(口演) 公衆衛生情報研究協議会, 2003 年, 神奈川県
  - 9) 砂川富正. 「疫学的対応に基づいた健康危機管理」(口演) 北海道衛生公衆衛生セミナー, 2003 年, 北海道
  - 10) 谷口清州, 進藤奈邦子, 木村幹男, 他. インフルエンザ 2001/2002 シーズンの流行状況と公衆衛生的インパクト. 第 6 回日本ワクチン学会. 2002 年 11 月, 千葉県.
  - 11) 谷口清州, 進藤奈邦子, 橋本修二, 村上義孝, 永井正規, 淵上博司. 感染症発生動向調査に基づく研究 第 2 報 警報・注意報の発生状況. 第 61 回日本公衆衛生学会. 2002 年 10 月, さいたま市.
  - 12) 谷口清州. 世界の感染症の状況と WHO の戦略. 中部日本小児科学会. 2002 年 9 月, 津市
  - 13) 谷口清州. 近年の麻疹流行の日本国民へのインパクト. 第 25 回日本造血細胞移植学会. 2002 年 10 月. 大阪市
  - 14) 谷口清州. ワールドカップ症例別サーベイランスについて. 第 7 回地域保健のためのインターネット研究会. 2002 年 11 月 東京
  - 15) 谷口清州. 症候群別サーベイランスの結果報告. 第 16 回公衆衛生情報研究協議会. 2002 年 1 月, 横浜市
  - 16) 谷口清州. 国際的に問題となるウイルス性脳炎. 第 43 回日本臨床ウイルス学会. 2002 年 6 月, 秋田市.
  - 17) 三浦聡之, 木村幹男, 日谷明裕, 鯉淵智彦, 中村仁美, 遠藤宗臣, 高橋 孝, 小田原隆, 中村哲也, 岩本愛吉: 東京大学医科学研究所附属病院におけるマラリアの統計 過去 10 年間の検討 第 76 回日本感染症学会総会 2002
  - 18) 木村幹男, 名和行文, 大友弘士: 熱帯病・寄生虫症治療のための稀用薬の保管・供給体制. 日本感染症学会 第 51 回東日本地方会総会 2002.
  - 19) 木村幹男, 名和行文, 大友弘士, 「熱帯病に対するオーファンドラッグ開発研究」班: ワークショップ「旅行医学」. 熱帯病・寄生虫症稀用薬の保管・供給体制の現況. 第 43 回日本熱帯医学会大会 2002.
  - 20) 川上桂子, 木村幹男, 橋本迪子, 青木和子, 浜田 勝, 谷畑健生: ワークショップ「旅行医学」. 日本人海外渡航予定者のマラリアに関する意識. 第 43 回日本熱帯医学会大会 2002.
  - 21) 古田隆久, 菊地たかね, 木村幹男, 渡辺直照: ワークショップ「原虫感染防御」. IgE によるマラリア原虫感染防御について. 第 43 回日本熱帯医学会大会 2002.
  - 22) 岩堀淳一郎, 山本昭夫, Vuddhakul, V., Kalnawakul, S., Chowdhury, A., 重松美加, 小坂健, 豊福肇, 春日文子, 山本茂貴, 西淵光昭: タイ南部における赤貝の摂食に伴う腸炎ピブリオ感染の定量的リスクアセスメント 微生物学的リスクアセスメントにおける国際協力. 日本リスク研究学会第 15 回研究発表会

- 23) 齊藤剛仁 山下和予 岡部信彦:病原体サーベイランスにおけるムンプスウイルスの検出状況 第 34 回日本小児感染症学会総会 2002 年 11 月、札幌
- 24) 新井 智、高崎智彦、多屋馨子、高崎智彦、松永泰子、倉根一郎、岡部信彦、流行予測調査グループ. 2000 年度感染症流行予測調査事業の結果を用いた、小児における予防接種歴別日本脳炎ウイルス中和抗体保有状況. 2002 年 第 6 回ワクチン学会. 2002 年 11 月.
- 25) 多屋馨子、新井 智、田代真人、岡部信彦、流行予測調査グループ. 本邦健康人における麻疹抗体保有状況及び予防接種率と麻疹流行状況 ~ 2001 年度調査 ~ . 2002 年 第 34 回日本小児感染症学会. 2002 年 11 月.
- 26) 新井 智、高崎智彦、多屋馨子、高崎智彦、松永泰子、倉根一郎、岡部信彦、流行予測調査グループ. 2000 年度感染症流行予測調査事業の結果を用いた、小児における予防接種歴別日本脳炎ウイルス中和抗体保有状況. 2002 年 第 34 回日本症に感染症学会. 2002 年 11 月.
- 27) 吉川徹、多田有希、中島一敏、新井智、大山卓昭、岡部信彦. 動物園における人獣共通感染症の危機管理とリスクマネージメントの一事例. 第 75 回日本産業衛生学会, 神戸市. 2002 年 4 月
- 28) 多屋馨子:院内のウイルス感染症予防対策 ~ 予防接種とサーベイランスを有効に用いるにはどうしたらいいか? ~ 愛以外に地球を救う それはワクチン -第 85 回臨床研究セミナー(大阪)、2002.1.18.
- 29) 多屋馨子:院内感染対策:何が問題か? 防げるウイルス感染症とその対策.第 13 回日本臨床微生物学会(東京)、2002.1.25-27
- 30) 多屋馨子、長谷川斐子、岡部信彦、井上栄:IAHA 法による Mumps 抗体価測定の見直し. 第 2 回抗体測定研究会(東京)、2002.2.15
- 31) 多屋馨子、新井智、岡部信彦:我が国の麻疹抗体保有率とワクチン接種率 ~ 2000 年度感染症流行予測調査より ~ . 第 105 回日本小児科学会学術集会(名古屋)、2002.4.19-21.
- 32) 多屋馨子:HHV-6 DNA の遺伝的伝播.第 9 回日本ヘルペス感染症フォーラム(小樽)、2002.8.23-24.
- 33) 多屋馨子:社会にとってのワクチン、個人にとってのワクチン:集団と個人.大阪小児科学会ワクチンシンポジウム(大阪)、2002.9.29
- 34) 多屋馨子、橋本迪子、岡部信彦:渡航前接種を実施した破傷風および A 型肝炎ワクチンの免疫獲得に関する検討.第 6 回日本ワクチン学会(千葉)、2002.11.30-12.1
- 35) 隈元星子、森屋一雄、諸石早苗、伊藤健一郎:散発下痢症患者及び健康乳幼児由来大腸菌における局在性及び凝集性付着大腸菌関連遺伝子の保有状況について(第 2 報). 第 76 回日本感染症学会総会. 2002
- 36) 西尾治、秋山美穂、加藤由美子:リアルタイム PCR 法による A 型肝炎ウイルスの検出について. 第 76 回日本感染症学会、2002 年 4 月、東京
- 37) 西尾治:ウイルス性食中毒の病因. 第 42 回日本臨床ウイルス学会、2002 年 6 月、秋田
- 38) 藤本嗣人、近平雅嗣、岡藤輝夫、西尾治、吉田弘:兵庫県において 1993 年 10 月 ~ 1994 年 10 月に無菌性髄膜炎と発疹症の流行を引き起こしたエコーウイルス 9 型の分子疫学. 第 42 回日本臨床ウイルス学会、2002 年 6 月、秋田
- 39) 西尾治:ウイルス性食中毒. 第 134 回日本獣医学会学術集会、2002 年 9 月、岐阜
- 40) 田中俊光、西尾治:千葉市内の市場で流通する輸入二枚貝等からの SRSV 遺伝子検出状況について. 獣医公衆衛生研究平成 14 年度調査研究発表会、2002 年 9 月、東京
- 41) 大瀬戸光明、近藤玲子、山下育孝、吉田紀美、杉枝正明、古屋由美子、藤本嗣人、長谷川斐子、加藤由美子、秋山美穂、西尾治:輸入魚介類のウイルス汚染実態調査. 第 50 回日本ウイルス学会、2002 年 10 月、札幌
- 42) 古屋由美子、原みゆき、片山丘、今井光信、加藤由美子、秋山美穂、西尾治:イカ塩辛が原因の Norwalk virus による食中毒事例. 第 50 回日本ウイルス学会、2002 年 10 月、札幌
- 43) 西田知子、三上稔之、沖村容子、篠原美千代、西香南子、川本歩、木村博一、杉枝正明、大瀬戸光明、春木考祐、鈴木宏、西尾治:国内産および韓国産カキのノーウォークウイルスおよび A 型肝炎ウイルスの汚染状況. 第 50 回日本ウイルス学会、2002 年 10 月、札幌
- 44) 藤本嗣人、近平雅嗣、宗村徹也、西尾治、吉田弘:脳症患者の咽頭ぬぐい液および髄液から検出されたコクサッキー A 群ウイルス. 第 50 回日本ウイルス学会、2002 年 10 月、札幌
- 45) 杉枝正明、大瀬戸光明、福田伸治、川本歩、木村博一、三上稔之、西田知子、新川奈緒美、西香南子、古屋由

- 美子、西尾治：全国各地で発生したノーウォークウイルス (NV)による食中毒事例について．第50回日本ウイルス学会、2002年10月、札幌
- 46) 新川奈緒美、中山浩一郎、伊東祐治、西尾治：Norwalk virusによる胃腸炎集団発生患者から排泄されるウイルス量と遺伝子型について．第50回日本ウイルス学会、2002年10月、札幌
- 47) 西香南子、松野重夫、西尾治：カキ及び養殖海域の Norwalk virus 調査と環境因子との関連性．第50回日本ウイルス学会、2002年10月、札幌
- 48) 山下育孝、大瀬戸光明、吉田紀美、近藤玲子、天辻康夫、一口毅、西尾治：ロタウイルスとアデノウイルスを同時に鑑別して検出する迅速診断キットの評価．第50回日本ウイルス学会、2002年10月、札幌
- 49) 藤本嗣人、近平雅嗣、増田邦義、西尾治、吉田茂：日本において一般的に軽症と考えられている手足口病起因ウイルスが、兵庫県内において死亡例と後遺症例を含む、重症中枢神経患者を多発させたケースに関する調査研究．平成14年度兵庫県公衆衛生協会総会兼中央研究会、2002年、神戸
- 50) 新川奈緒美、伊東祐治、西尾治 他：ノーウォークウイルスによる食中毒事例と排泄されるウイルス量について．第44回鹿児島県公衆衛生学会、2002年、鹿児島
- 51) 新川奈緒美、中山浩一郎、湯又義勝、西尾治：Norwalk virusによる集団発生事例の疫学と患者から排泄されるウイルス量．第28回九州衛生環境技術協議会、2002年、宮崎
- 52) 入谷展弘、勢戸祥介、久保英幸、村上司、綾田稔、小倉壽、春木孝祐、西尾治：市販生カキからのノーウォークウイルスおよびA型肝炎ウイルスの検出．39回近畿地区ウイルス疾患協議会、2003年2月、神戸